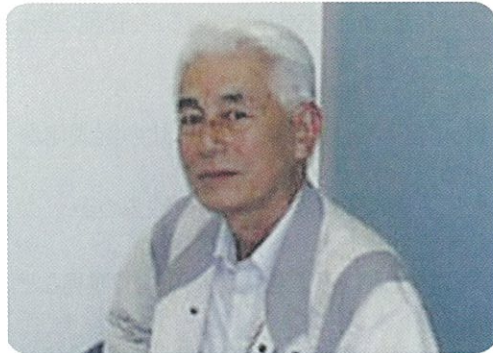


## 現場のプロに聞く(その2 地表踏査)

今回は資源から土木の調査まで幅広い分野で地表踏査をご経験されてきた方々にお話を伺いました。ご両名共に「画伯」の異名を持ち、その精緻なマッピングは地質屋のあこがれの的でもありました。



藤井 克司(ふじい かつし)氏  
昭和5年8月18日生 70歳 北朝鮮生まれ、香川県育ち



林 盛照(はやし よしてる)氏  
昭和7年5月13日生 69歳 広島、呉生まれ、愛媛県育ち

### プロフィール

ご両名共に昭和25-26年 住友金属鉱山(株)に入社され、以降一貫して別子鉱山の坑内、抗外調査を担当。別子鉱山が昭和48年に閉山になるに伴って、昭和49-51年からは住友金属コンサルタント(株)に配転となり、以降は道路公団、建設省等の地質、土質調査に従事。昭和60年まで正社員としてご活躍、ご退職後も平成11年頃まで若手の指導も兼ねた踏査やコア読みに力を発揮されてこられた。

—— どうして地質の道に入られたのですか？

藤井、林) 特に理由は無いが、面接時に「細かい仕事が好き」と言ったら「地質」に配属された。

—— 最初はどのような仕事をなさっていましたか？

藤井、林) 入社当社は、まず「うけ」(サンプルを籠で受ける)をやらされた。服装は、入社当初は上半身裸で、下は褌一枚。「うけ」は2ヶ月くらいで、すぐスケッチに回る。坑道内のサンプリングとスケッチが中心やったね。午前中は二人一組で坑内作業、午後はスケッチの整理がふつうやね。昭和32年頃までは地下足袋にゲートル、キャハンのスタイル。昭和32年以降、現在の様な保安靴、ヘルメット姿となった。

—— 地質調査の技術はどうやって学ばれたのでしょうか？

藤井、林) そりゃ、すべて独学。坑内や野外

作業で地質や構造の取り方(クリノメータで何を測るか)をひと(地質屋や先輩技術者)のやるのをみて覚えていった。スケッチも同様。研修の様なことは無かった。経験しかない。その結果として、フィールドの歩き方や地質(石)のみかたが身に付く。慣れてくれば断層などでも切れぎわを見ればどっちに動いたかが判るようになるし、(せん断面を)手でなでたりもする。効いてるかどうか(規模が大きいかどうか)、正逆の判断、これがもめとっても(破碎されていても)判る。特にどっちに動いたかが判らんと、困る(正しいマッピングが出来ない)しね。

—— どのような現場を経験されてきましたか？

藤井、林) 別子がほとんどやけど、海外では東南アジアやトルコに行ったね。国内では北海道から鹿児島まで行っとるね。豊予、青函の踏査や坑内スケッチもやったな。土木では中国自動車道の踏査をたくさんやったね。

